

をたどった。連合弁膜症であっても可能であれば、弁形成術を積極的に施行して良いと考えられた。

10) ヘパリンコーティングチューブによる無ヘパリン化ローラポンプ使用補助循環の臨床応用

齊藤 憲・大関 一 (新潟大学)
山本 和男・岡崎 裕史 (第二外科)
横沢 忠夫・江口 昭治

開心術後の人工心肺離脱不能例や重症 LOS 症例において IABP による圧補助だけでは血行動態の改善が見られない症例がある。そういった症例に対しヘパリンコーティングチューブとローラポンプを用いたヘパリン化しない比較的簡便な補助循環を行なった。人工心肺離脱不能の 5 例と術後 LOS の 1 例の計 6 例に IABP 駆動下で使用した。初期の症例で補助流量が毎分 1000ml 以下の例では酸素化装置のない V-A バイパスとし、それ以外では左房脱血、大腿動脈送血による左心バイパスとした。6 例中 4 例に長期生存を得た。全症例とも血栓塞栓症を示唆する所見はなかった。本方法は比較的簡便に行ない得る補助循環法として有用であると思われる。

11) 化学療法が著効を奏した HCG 産生縦隔腫瘍の一手術例

相馬 孝博・小熊 文昭 (新潟県立がんセンター新潟病院胸部外科)
寺島 雅範
坂田安之輔・小松原秀一 (同 泌尿器科)
渡辺 学

甲状腺機能亢進にて発見された hCG 産生縦隔腫瘍両肺転移に対し、CDDP, VP-16 を投与した結果、原発巣・転移巣ともに著明に縮小し、hCG も正常に近くなった。その後胸骨正中切開にて、腫瘍摘出・両肺転移切除を施行したが、組織学的にはいずれも壊死組織であった。全身転移が疑われる場合に、外科療法に先立ち化学療法を優先させて有効であった一例を報告する。

12) 胸部外傷治療の現況について

柴田 芳樹・大関 一 (秋田赤十字病院)
多田 哲也・八木 実 (外科)
佐藤 攻・川瀬 忠
工藤 進英・高野 征雄

秋田県交通災害センターにおける、過去 2 年間の胸部外傷の概要を検討した。外来受診患者 12568 名中入院を要した者 2402 名でそのうち、胸部外傷を有する者は 107

例であった。平均年齢は 43 歳で、男女比は 4 : 1 で男に多かった。胸部外傷の原因は交通事故、転落事故が多く、損傷の内訳は肋骨骨折 87 例 (78%) 血気胸 50 例 (45%) 肺挫傷 14 例 (13%) 気管支損傷 1 例で心大血管損傷はなかった。合併外傷は頭頸部 28 例、四肢骨盤骨折等 46 例腹部臓器損傷 9 例であった。胸腔ドレナージなどによる保存的治療が殆どで、人工呼吸を要したものは 2 例、手術を行ったものは 4 例で、手術死亡はなかった。死亡は 17 例で、殆どが頭頸部腹部損傷合併例であった。胸部外傷は、その他の部位の外傷と合併して発生する事が多いので頭部、腹部傷害を念頭におき、その早期発見、治療心がける事が重要である。

13) 深大腿静脈血栓症に対する動静脈吻合付バルマ手術の 1 例

吉野 武・吉野 利夫 (国立療養所富山病院 外科)
吉岡 勉・西能 竝 (医療法人五省会 西能病院整形外科)

65 才男性で左大腿腫脹を認め、歩行時特に昇段時に左下肢痛著明となる静脈性破行を示す症例に対し左下肢静脈造影を施行した。総腸骨動脈は完全に閉塞しており、左大腿静脈内に血栓を認めた。動静脈吻合付バルマ手術の適応と考え右大伏在静脈と左大腿静脈を吻合し、さらにジャンプして左大腿動脈に吻合を加えた。4 週後動静脈吻合を結紮した。術後患肢の腫脹は残るものの静脈性破行は消失し、自転車に乗ることも可能となった。ストレーンゲージプレティスモグラムにて術前、術後の腫脹程度を評価した。術前値 18ml/min/100ml tissue から術後 42ml/min/100ml tissue へと改善しており、安静時の値としては、正常値を示した。バルマ手術は効果が少ないとされている手術術式であるが、動静脈吻合を加え、さらに症例をえらべば、効果を期待出来る手術術式と考えられ報告した。

14) 孤立性内腸骨動脈瘤の 3 治験例

片桐 幹夫・鈴木 万里 (立川総合病院)
山本 和男・中沢 聡 (心臓血管センター)
春谷 重孝・坂下 勲

内腸骨動脈に局限した動脈瘤の 3 例を経験した。年齢は 61 才、89 才、78 才で、うち 2 例は破裂性であった。手術は、大動脈外腸骨動脈バイパスないしは大動脈大腿動脈バイパス、および瘤の流入部と流出口の閉鎖を施行した。いずれも良好に経過し退院した。